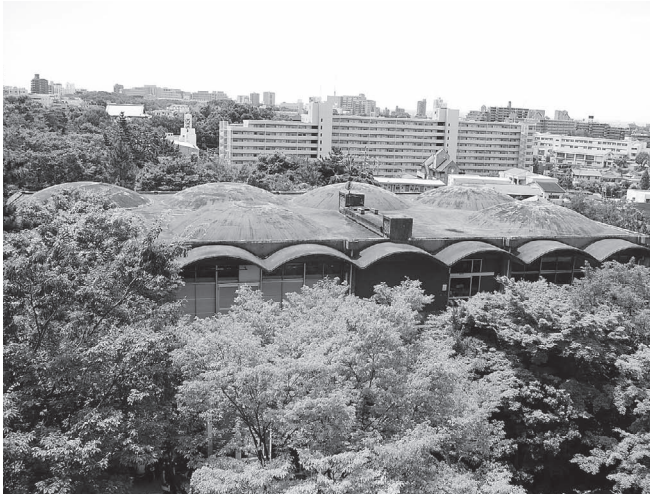


アルケイアー記録・情報・歴史—
第4号 2010年3月 1-15頁
南山大学史料室

レーモンドの大学会館を撮影して

高橋 敏郎



1

An Architect Takes Photographs of Antonin Raymond's Dining Hall
of Nanzan University Campus

TAKAHASHI Toshiro

archeia: documents, information and history
No.4 March, 2010 pp1-15
Nanzan University Archives

レーモンドの大学会館を撮影して

高橋 敏郎

撮影に伺ったのは夏の暑い朝だった。久しぶりに見る南山大学のキャンパスは、緑生い茂る中に建物が散在し、見事に自然と共存していた。

レーモンドの大学会館の記録写真を撮ってほしいとの依頼を受けたのは、夏に入って少し経った前期授業の最盛期の頃、漸く授業の山を越えて赴いたのは取り壊しの当日だった。

30数年前、学生時代に何回も神言神学院をスケッチに通ったころは、まだこれほどの自然との共存を感じさせるものではなかった。日本建築学会作品賞を受賞したこの建物は「文化不毛の地」と呼ばれる名古屋には稀な、隣のメタポリズムを表現した、当時の最先端を行く名古屋大学豊田講堂とともに、新しい現代建築として建築を目指す学生にとっての教科書的存在となっていた。

レーモンドの建築は記念碑的なスタイルをとらない。その都度、土地や外部環境や機能を考えながら実直な解決を実行している。キャンパスの中央を貫く軸線も、造形的な建築家だったら、必ず正面にモニュメント的なアイストップ（視線を受け止める造形要素）を置き、広場を構成し、劇的な空間を演出しようとするであろう。私たち建築を目指す学生にとっては物足りない感があった。だがいまこの年になると、そうしなかったレーモンドの「丘陵の敷地の特性を生かし、眺望を確保し、ダイナミックなシークエンスを構成しようとした意図」がよくわかる。長い年月を経て、緑も根付き生い茂ったことにより、レーモンドが描いていたキャンパスの完成時のイメージに辿り着いたといえよう。

大学会館（専門雑誌発表時は食堂棟と記されていた）は、軸線の脇に木々に囲まれてひっそりと建っていた。ブリッジの手前から緑のトンネル越に見た2階の波打つ庇の外観は美しい。各所に年月による崩壊の兆しがあるが、西側と南側に設けられたプレキャストのブリーズソレイユ（日除け）のリズム感もまた清々しい。このモチーフは食堂棟に始まり、隣の図書館棟から、大学全体へと展開された。1階食堂の内部から見返すと、ブリーズソレイユを通したやわらかい光のグラデーションが波のように押し寄せ、障子を通したあるいはヨシズ越に入る光を想起させ、彼が日本建築に受けた影響を垣間見る感じがする。内部空間は本人が自伝で述べた「もし私が真に「機能的」なデザインを保つ事が出来るとしたら、また、もし私がそのデザインをあらゆる意味において「単純な」「直接的」な、「経済的」なものに保つことが出来るとしたら、そのデザインは構造そのものを唯一の装飾とするものでなければならないでしょう」（アントニン・レーモンド「自然を基本として」『新建築』第39巻第9号、1964年9月）、その言葉通りに、どちらかといえばそっけない、だが良く見ると細部まで気を配った、率直で直截な造形である。各所の床や天井に施された控えめな市松模様の装飾は、おそらく使われている時には誰も気にしなかったものであろう。階段室の市松のタイル張りはおそらくちょっとしたお洒落なアクセントだが、彼の建築に興味が無ければ見過ごされる程度だ。ラウンジの低く緩やかなドーム（球状シェル）の連続は、内部の光の効果を和らげる役割をなして、ここにも彼の日本建築から受けた影響が形をかえて現れ、落ち着いた空間を作り出していると感じさせた。この日も、3階のラウンジには女子学生が一人だけ本をひろげていて、いかにも大学らしい、微笑ましい雰囲気であった。

写真撮影を終えて外に出るとすでに工事は始まり、アプローチのペープメントは剥がされはじめていた。老朽化と、IT技術や設備の進歩に裏打ちされた時代との乖離が、いままた現代建築の遺産を払拭していくのかという寂寥感を抱かせるが、建物の最後の姿を見た建築家として、その精神を後世に伝える役割をまた担わなければなるまいとも自分に言い聞かせながら南山大

レーモンドの大学会館を撮影して

学を後にした。

新に建設される施設が、レーモンドが考えた「ヒューマンスケールで自然と共存する」キャンパスを形作る建築であってほしいと願う。

2009年7月16日撮影。この時に撮影された写真は、すべて南山大学史料室に保管されている。



上階のアーチ型の庇。



アーチ型の波打つ庇が美しい。このアーチ型はおそらく大学会館屋根のドーム（球状シェル）から発想されたものであろう。



アーチ型の波打底。3階からブリッジへと継がるテラス。



プレキャストのブリーズソレイユ。西側からの日除けと、通風をよりよく得るための工夫。清々しいリズム感がある。この食堂棟でのデザインモチーフが大学全体に展開された。



ブリーズソレイユ。取付部分が剥離しかかっている。風雨にさらされ、下側取付部分に常に雨水が浸透するため、剥離がおこっている。変色もある。



南面ブリーズソレイユ。西面は縦だけだが南面では上からの日射を意識して水平ルーバーが取付けられている。



打放しのコーンの埋め戻した配列にも気づかひが見える。普通は揃えるが、おそらく寸法指定によるデザイン。



柱の打継ぎ目地が美しい。



緑のトンネル越しに見える波打つ庇の曲線は美しい。レーモンドは完成イメージでは、おそらくこうなることを想定していたであろう。



天井面のさりげない照明の配列とボードの市松模様装飾。



床面にもPタイルの市松模様の装飾が施されている。



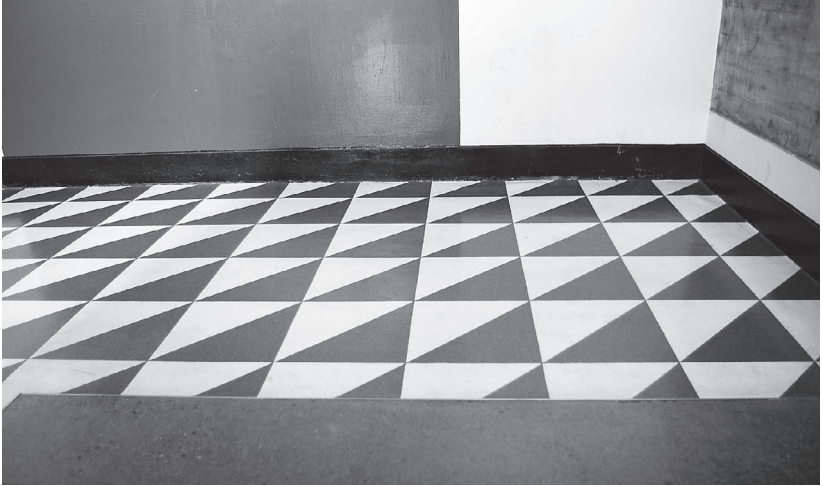
ブリーズソレイユの織りなす光のグラデーションが美しい。本来は西日を避けるためだが、結果として光のデザインとなっている。日本人（年配者）には当たり前すぎて見過ごしてしまう。



日本建築の連子格子や御簾の織りなす光のようだ。



打ち放しの柱、梁と天井材との取り合わせにも気づかひが見える。木目のあらわれた鉄筋コンクリート打ち放しの構造そのものを見せることで装飾としている。



床面のタイル貼に、控え目な装飾。レーモンドの意図したものである。



浅く緩やかなドーム天井の光のグラデーションが光をやわらげ、落ち着いた雰囲気をかもしだしている。



軸線と45° 傾けられた床面装飾。南山大学の建築には、この手法が多く用いられている。



2階部分の床面装飾。南山大学の建物では、各所にこのような市松模様や45° 傾けた装飾があらわれている。



アーチ形 庇の連続と屋根の緩やかなドームの繰り返しが美しい。食堂棟では球面シェルによる屋根構造を採用した。庇はその断面をイメージしたものと思われる。このことにより、直線ばかりでなく、やわらかな形となり、食堂・学生会館として独自の形態をとった。